

会津漆器技術後継者訓練校における伝統技術の 継承と後継者育成への取り組み

会津若松市観光商工部商工課 三浦 裕子

1. 会津塗の歴史

会津塗りは、400年以上の歴史を持つ国の伝統的工芸品です。会津漆器が本格的に作られるようになったのは、1590年に蒲生氏郷が会津の領主となつてから、近江の国（今の滋賀県）より木地師や塗師を会津に迎え入れ、漆器を作らせたことに始まります。江戸時代以降は、新しい蒔絵技術が積極的に取り入れられ、長崎やオランダへ輸出するなど、会津の漆器業は大変盛んになります。戊辰戦争により一時低迷の時期を迎えますが、明治政府の援助により再興され、その後、さらに技術を改良し、現在では食器、装飾、文具、仏具など、さまざまな分野で製品が作られています。

会津塗りに「会津絵」や「変り塗り」、「沈金」など、数多くの伝統技法があり、多くの職人がそれぞれの工程を担当する分業制によって作り上げられます。木地を挽く木地師、箱を作る惣輪師（そうわし）、漆を塗る塗り師、加飾する蒔絵師など、多くの職人とその技術により、高い品質を実現しています。

2. 会津漆器技術後継者訓練校の認定の経緯

会津塗の後継者育成事業は、昭和46年に、会津漆器協同組合連合会、会津若松市、県ハイテクプラザ（旧県工業試験場）、業界などの参加により設立した「会津漆器技術後継者養成協議会」が実施団体となり、会津漆器後継者養成所を開設したことに始まります。

開設以降、平成10年度末までの卒業生は165名を数え、その多くが現在の会津漆器業界に定着しているなど、一定の成果をあげてきました。

しかしながら、事業運営に当たっては、養成所講師の確保や研修施設の老朽化、卒業生の身分保証など、多くの問題点が指摘されていました。

こうした問題を克服するため、平成11年12月に、福島県職業能力開発課へ「中小企業人材育成プロジェクト」実施団体申請書を提出。翌平成12年4月より、認定職業訓練校化を目指した人材育成プロジェクト事業の取り組みが始まりました。

こうして進められたプロジェクト事業の結果、平成15年度より、厚生労働省の認可を受け、会津漆器技術後継者訓練校として新たなスタートを切ることとなりました。

3. 訓練校の運営

会津漆器技術後継者訓練校は、会津漆器協同組合が運営を行っています。運営に当たっては、会津漆器協同組合理事をはじめ、会津若松市等関係機関、学識経験者による「会津漆器技術後継者訓練校運営会議」を組織し、この中で、カリキュラム設定、予算・決算、講師選定等を協議します。平成19年度の運営費（決算）については次記のとおりです。

4. 訓練目標とカリキュラム

当訓練校では、会津漆器の歴史、技術概論、デザ

項目	決算	摘要
前年度繰越金	642,755円	
補助金	2,238,000円 3,130,000円	(県補助金) (市補助金)
組合負担金	3,300,000円	
雑収入	5,798円	
合計	9,316,553円	

イン実習、素描、錆付け等の基礎学科と基礎実技を習得し、その後、専攻学科、専攻実技を習得することで、修了時に技能士補資格の取得を目指しています。

研修の期間は、2年間で2,800時間。毎週月曜日から木曜日まで実施しています。2年間の研修期間のうち、1年目の初めは全員同じ基礎学科（※1）、基礎実技（※2）を学びます。その後、1年目の11月頃から、それぞれ入校時に選択した専攻「蒔絵」（※3）、「塗り」（※4）に分かれて研修を行います。

※1(基礎学科)・・・漆工史、窯業史、木工史、会津漆器技術概論、木工概論、合成樹脂概論、塗装技術概論、産業財産権概論、CG実習、平面構成、立体構成、造型、デッサン、素描、ほか

※2(基礎実技)・・・塗実習（用具制作、塗料調合、下地、下塗、上塗）呂色仕上、加飾実習（漆絵、朱磨き蒔絵、消粉蒔絵、色粉蒔絵）

※3(専攻「蒔絵」)・・・消蒔絵、消金地、平極蒔絵、沈金、家紋、平研蒔絵、高蒔絵、研切蒔絵、木地蒔絵、卵殻、螺鈿、乾漆

※4(専攻「塗り」)・・・下地実習、下塗、中塗、上塗、呂色、金虫喰塗り、花塗、乾漆

カリキュラムは右記のとおり。

5. 指導体制

普通課程工芸系漆器科の定員10名（1学年の定数5名）に対して、指導員6名、講師25名が指導を行

(カリキュラム)

	教科の科目および訓練時間		
	科目	第1年度	第2年度
普通課程 工芸系漆器科	1. 学 科	880	240
	(1) 系基礎学科	(176)	
	生産工学概論	40	
	美術工芸史	44	
	デザイン	72	
	安全衛生	20	
	(2) 専攻学科	(740)	(240)
	工芸化学	48	
	材料	92	
	工作法	224	180
	漆塗装法	340	132
	2. 実 技	520	1160
	(1) 系基礎実技	(116)	(188)
	器工具基本使用法	20	8
	機械操作基本実習	20	
	デザイン実習	56	180
	安全衛生作業法	20	
(2) 専攻実技	(404)	(972)	
器工具基本使用法	40		
機械操作基本実習	40		
下地調整実習	80	16	
漆塗装、加飾実習	244	620	
卒業制作		336	
合 計		1400	1400

っています。指導員、講師については、毎年、会津漆器協同組合員等に対して次年度の公募を行い、訓練校運営会議において選定し、組合理事会で決定しています。

また、当訓練校では、訓練生が単に技術を習得するだけではなく、会津漆りの伝統や文化を守りながらも、柔軟に新しい感覚をものづくりの中に取り入れていく感性や姿勢を学ばせたいと願っています。

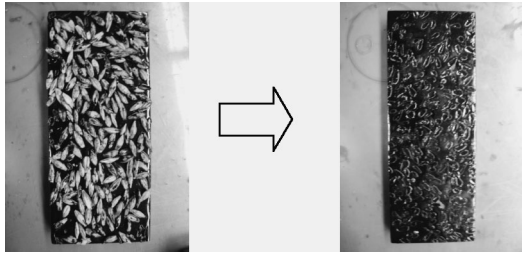
6. 実習の様子

塗科専攻の学生は、2年間の授業の中で、会津塗り独特の技法を数多く学びます。その技法の1つである「金虫喰塗り（きんむしくいぬり）」の実習は、2年生の4月下旬から6月下旬の2ヵ月間にかけて取り組まれます。

「金虫喰塗り」とは、会津塗り独特の模様で、この模様は、生地に黒漆を厚塗りして、乾く前に粉殻を全面に手蒔きし、乾燥後に蒔いた粉殻を取り除くことにより作られます。

(第2工程：虫立て)
黒漆を塗り粉殻を撒く

(第3工程：粉はがし)
乾燥後に撒いた粉を取り除く



その後、表面にできた凹凸の上に銀粉を蒔いて乾燥させ、漆を塗り重ねた後に、炭で丹念に磨いて完成させます。

金虫喰塗りの技法は、完成までに実に40もの手間隙がかかります。金虫喰塗りを専門で指導している吉井信公先生が、この作業を20の工程に分け、2ヵ月間かけて伝えていきます。

今年も塗専攻2年生の3名が、この技法を学んでいます。この日は、7つ目の工程である「辺掛け」の実習です。真剣な表情で取り組む齋藤麻理子さんは、地元出身の塗専攻2年生。(写真1)“表面の凹凸を研ぎすぎてしまうと、金虫喰塗りが持つ模様の良さを生かすことができず失敗してしまいます。研ぎ加減が難しい反面、とても面白い技法です。”



写真1 第7工程：辺掛け

7. 成果の発表

こうして訓練生によって作られた作品は、毎年2月下旬から3月上旬にかけて開催される「卒業制作展」で展示され、一般の来場者の方々に公開しています。卒業制作展は市内の中心部で開催されるため、

毎年多くの方々が訪れるなど、市民が会津漆器を身近に感じる“場”の提供としての役割も担っています。

卒業制作展では、これまでに授業で作成してきた作品に加えて、訓練生たちが自分の好きな技法を選び、卒業制作作品づくりに取り組みます。また、展示する作品だけでなく、案内用のダイレクトメールや会場のディスプレイもすべて生徒たちの手作りで進められるため、自分たちの作品をよりわかりやすく、見やすく展示しようと工夫が凝らされます。



写真2 卒業制作展案内ダイレクトメール



写真3 卒業制作展会場内の様子

8. 訓練生の声

●塗専攻2年生の薄井綾子さんは、茨城県日立市出身。“高校卒業後、以前から興味があった漆器の勉強のために会津にきました。初めて会津漆器に触れた

ときの心地良さが、今でも忘れられません。これからも、いろいろなことに怖がらずに挑戦し、自分らしさを形にしていける作り手になりたいです。”



写真4 実習風景

●塗専攻2年の荻野剛司さんは、富山県高岡市出身。“漆器を勉強するため、全国の漆器産地を見てまわり、会津に決めました。基礎から教えてくれる学校はここにしかなく、技術向上に集中できる希望どおりの環境です。伝統的なものを守りながらも、新しいものを取り入れて作品を作っていきたいです。”



写真5 実習風景

9. 修了後の進路

現在までに、会津漆器技術後継者訓練校として18名の訓練生が修了しています。修了後の進路については下記表のとおりです。

	性別	出身地	専攻	修了後の進路
1	女	福島県	蒔絵	市内漆器業に従事
2	女	宮城県	塗	県外へ転出
3	女	神奈川県	蒔絵	県外へ転出
4	女	福島県	蒔絵	郡山市へ転出
5	男	神奈川県	塗	県外漆器業に従事
6	男	会津若松市	塗	市内漆器業に従事
7	女	会津若松市	蒔絵	市内漆器業に従事
8	女	愛知県	蒔絵	県外へ転出
9	女	栃木県	塗	自立支援中
10	男	福井県	塗	県外漆器業に従事
11	女	宮城県	蒔絵	県外へ転出
12	女	茨城県	蒔絵	市内で修行中
13	女	東京都	蒔絵	自立支援中
14	女	会津若松市	塗	市内漆器業に従事
15	女	北海道	塗	市内に就職
16	男	会津若松市	蒔絵	市内漆器業に従事
17	女	福島県	蒔絵	喜多方市内漆器業に従事
18	女	福島県	蒔絵	県外漆器業に従事

2年間の訓練後、すぐに作り手として仕事を得ることは技術的にも難しく、そのため、何らかのかたちで会津漆器に従事できる者は、半数程度というのが現状です。

会津漆器が、今後も地域の産業として発展していくためには、会津塗りの伝統的技術と技法を将来にしっかりと継承し、伝統を生かしたものづくりを基本としながらも、現在の生活スタイルへ提案できる新しい商品開発に取り組んでいくことが不可欠です。

このため、訓練校における後継者育成とあわせて、修了後に彼らの技術をさらに高め、活躍できる場を提供していけるシステムを構築することが急務になっています。